

# 東京大学史料編纂所における内地研修

真木 隆行

## はじめに

2010年5月から10月までの約6ヶ月間、山口大学の「内地研究員」制度の恩恵に浴し、東京大学史料編纂所に内地研修させていただいた。ありがたくも同所では「国内研究員」としての在籍を許され、高橋敏子先生を指導教員と仰ぎ、貴重な研修期間を過ごすことができた。まずはこの研修にあたってお世話になった両大学の皆様に深謝を捧げたい。以下では、今回の研修とそれに至る経緯の一端を報告したい。

## 1、研修先と研修内容の一端

今回の研修先となった史料編纂所は、東京大学本郷キャンパスの赤門を入ってすぐの建物内にある。ここは、日本の古代から近代までの史料の収集と研究をおこない、諸種の史料集を編纂刊行する機関である。

現在は東京大学の附置研究所となっているが、実はその前身機関は、かつて明治政府が進めた修史事業の担当部署であった。この機関が1888年(明治21年)に帝国大学(のち東京大学)へ移管され、スタッフのうち重野安繹氏ら3人が教授を兼ね、同学に国史科の新設をももたらした。この移管から5年後には、従来の修史事業を中止し、史料編纂を事業の中心に据える方針転換を遂げて今日に至る。この間、機関名や所在については紆余曲折を経たものの、ここは日本史研究史上の生ける「史跡」の1つ。その書庫に今回入ることが許され、実に感慨無量であった。

この史料編纂所は、明治期以来、『大日本史料』や『大日本古文書』をはじめ、日本史を研



究する上で基本となる諸種史料集の編纂刊行を続けている。とりわけ『大日本史料』は、1901年(明治34年)の刊行開始から百年余を経た今、実に400分冊に迫ろうとしている。古代の六国史の後を引き継ぎ、9世紀末から19世紀までの史料を可能な限り網羅し編年順にまとめるという、気の遠くなるような全体構想となっているため、これでもなお完成まで先は長い。

このような史料集編纂のためには、当然ながら、優秀な研究スタッフと国内外に及ぶ史料の網羅的な調査や収集が必要不可欠である。史料収集については、原本や写本を直接収集するのみならず、国内外にわたって史料採訪を実施し、各地に伝わる原本や写本からの複製(謄写本・影写本・写真帖などの作成)も進めており、明治期以来の蓄積は膨大なものとなっている。周知の古代中世史料であれば、その多くが複製の形でここにあるといっても過言ではなく、このような機関は国内において類例がない。

以上の所蔵史料については、一般利用もおおむね可能となっているが、その場合の閲覧や複製に際しては、所定の手続きが必要であり、書

庫にも入室できない。ところが「国内研究員」になれば、内部者に準じた利用が可能となり、貴重書庫以外の書庫に入室できる。そこで今回初めて、書庫内の膨大な書架群に拝謁できた次第である。検討したい史料のオリジナルな姿をすぐ確認できる最高の研究環境で、とても幸せな研究生を送らせていただいた。しかも、この春まで3年ほど経た耐震補強がらみの改修の結果、書庫には空調設備も導入されていた。真夏の書庫で快適に過ごせたのはそのおかげである。

研修期間中は、同所や総合図書館をはじめ学内各所の図書や学術誌を活用できたことも有益であった。日ごろ山口大学のような地方の国立大学では、必要な図書や学術誌が学内に所蔵されていないことが多く、学外からの取り寄せに頼らざるを得ない。ところが東京大学では、膨大な書架群を往来する脚力さえ使えば、そのようなストレスや時間のロスは感じなかった。心地よい汗をかきながら、読みたいものが学内で見つかる喜びにも支えられ、効率的に研究を進めることができた。

いっぽう研究の合間には、東京大学や史料編纂所の新傾向の一端を学ぶ機会も少なくなかった。とりわけ近年の史料編纂所の事業は、極めて多様かつ活発である。本来の多忙な編纂事業に加え、ウェブ上でも、日本史を研究する上で有益なデータベースを次々と一般公開するなど、研究機会のオープン化を通じて高度な社会貢献を果たし続けている。外部資金の獲得も活発であり、史料編纂所という一部局スタッフの獲得総額は、毎年億単位の額にのぼる。いかにも大変な職場環境で、当然ながら、所内を歩くだけでピリピリした空気を肌身に感じられた。ところがスタッフの先生方の御姿勢は、さすがにこちらが想像するよりは前向きに捉えられているように感じられた。その面でも大いに勉強になり、自己を恥じ、ある意味で勇気づけられた。

東京大学の本郷キャンパスを見渡すと、戦前のレトロな内田祥三建築群と、新しいデザインの建物群とが競い建つ。それらの各所には、法人化後と思われるが、いつの間にか様々な資本の店舗が点在するようになっていた。コンビニエンスストアも、キャンパス内に24時間営業を含めて数店舗あり、コーヒーチェーン店も、ドトール・スターバックス・タリーズが揃う。このほか軽食店やレストラン支店もいくつかあった。キャンパス内はこのようにテナント化が進み、ここで生息できそうなほど食事や買い物に便利であった。久々に来訪されるかたは、その変貌ぶりに、むしろ卒業生のかたこそ驚かれることであろう。

また東京に滞在できたおかげで、東京の各所で開かれる学会にも参加しやすく、研究発表もさせていただいた。東京内外の史料所蔵機関や史跡にも出かけ、史料調査や史跡踏査をおこなうにも好都合であった。そのほか生活者としていろいろ見聞を広められたこと、そして6ヶ月間とは言え、職場を離れてリフレッシュできたことも、大変貴重であった。

## 2、研修に至るまでの制度的諸問題

但し、この内地研修が決まるまでの学内的なハードルは高かった。そもそも内地研修制度は、国立大学の法人化に伴い、文部科学省の制度ではなくなり、各大学内部での予算措置となっていた。一部には廃止論さえ囁かれていると仄聞する。そもそも大学の現状から鑑みれば、応募の手を挙げることもささ躊躇われた。決断できたのは、講座内の先生からのお勧めと諸先生の御協力のおかげである。

ところが応募の決断後も、制度的な面でいろいろ多難であった。山口大学「内地研究員」の研究期間は、5月以降の6ヶ月間以上と定められているため、他の先生方やゼミ学生にかかる御迷惑を少なくするならば、最短の6ヶ月間となる。しかも卒論試問や入試の時期を避ければ、

必然的に5月～10月となる。

ところが、前年の夏頃に伺った内々の説明によれば、希望する年の1月にならなければ、公募の有無さえわからないという。しかも応募者が複数となれば選考がなされ、派遣の推薦が正式に決まるのは3月中～下旬という。5月開始まで日がない上に、もしも落選すれば、せっかく非開講にいただいた次年度の授業もそのままとなる。再チャレンジすれば、次々年度にも非開講が続くことになる。

いっぽう受け入れ先では、山口大学からの推薦を受けて、受け入れ可否の審議が教授会でなされる。5月開始を希望すれば、その審議機会は4月の教授会しかなく、受け入れ先に御迷惑がかかる。そもそも東京大学では、研究員などの受け入れに関する審議の多くは、前年度の秋頃までになされるという。当然ながら4月の時点で受け入れ人数が多ければ、実現が厳しくなる。

内地研修の現状は、実現までこれほど多難とわかり、さすがに怯んだ。ところがかたじけなくも、指導教員をお願いした高橋先生から御斟酌いただき、加藤友康所長（当時）をはじめ史料編纂所の方々から御高配を賜り、ありがたくも前年2009年の秋に事前の仮審議をしていただいた。しかも後日の正式な学長推薦を条件とし、御内諾までいただいた。またこの仮審議にむけた仮推薦では、湯川洋司学部長をはじめ人文学部の事務の方々にお世話になった。

2010年1月に入って、「内地研究員」の公募があったのは幸いだったが、その後も困難は続いた。実は前年10月、この公募の有無さえ不明だった段階で、科学研究費に応募済みであったが、なぜか遡ってそれが問題にされたのである。もしも科研費が内定されたら「内地研究員」を辞退せよと求められた。このことは同時に、「内地研究員」の正式決定が4月上旬にまでズレ込むことも意味した。なんとか御理解を求めると、逆に科研費のほうを辞退、としてもらうのが精

一杯であった。

3月中旬、学内で「内地研究員」の正式決定がなされた。4月に入ると、無理かと思われた科研費も思いがけず内定通知をいただいた。東京大学から「国内研究員」受け入れの御許可をいただいた頃、遺憾にも科研費については「機関判断による辞退」の手續きが進められた。科研費でお世話になった方々には、この場をお借りしてお詫びしたい。

以上の経験を踏まえると、山口大学の「内地研究員」制度は、現状のように冬季公募ではなく、夏季公募に改めるのがベストだと思う。今後の応募者のため、ぜひとも善処をお願いしたい。

## おわりに

今の御時世、内地研修させていただけだけでも光栄なことではある。但し謙虚なだけでは、地方大学教員の一員として、その必要性を伝える機会さえ失われる。すでにサバティカル制度が廃止された山口大学では、在外研修に距離のある研究分野の教員にとって、内地研修こそが貴重な自己研鑽の機会となる。かえって若手に勧めるくらいの度量を、この大学にはぜひ残したい。

なお私の研修期間が終了する10月頃には、研究面で検討し残したことも多く、後ろ髪を引かれる思いに駆られた。山口大学に戻ると、様々な仕事に迎えられ、十分に処理しきれず御迷惑をおかけした面もある。しかし、今回持ち帰った「今後の課題」の山も成果と捉え、1つ1つ今後活かすことで、お世話になった方々から賜った御恩に報いたい。